

人工知能美学芸術展 美意識のハードプロブレム

12月12日(日) NV サウンドホール コンサートプログラム Part 2

■ 川島素晴「コンセプチュアルウイルス音楽」ー 複雑なリズムは増殖し変異しオブジェに憑依する ー

1) ささきしおり作曲《バスドラムのためのソナタ第一番》(2021/世界初演)

演奏：ささきしおり、川島素晴

ささきしおりは、2018年より「ドローイングサウンドパフォーマンス/描線の音楽」を実践している。まずは、その「ドローイングサウンドパフォーマンス」について、説明が必要であろう。

鉛筆を走らせた時に聞こえる「音」と、見えている「線」の関係は描くものと描かれるものの素材、筆圧やスピードによって、「線」だけでなく「音」もまた多様に変化する。そもそも「描く行為」は、物同士をこすり合わせるということで、それならば「描くこと」は「演奏すること」でもある。「音をきく」「香をきく」「酒をきく」・・・古来日本では、目に見えない微細な変化を感じ分けようとする姿勢に「きく」という同じ語をあててきた。「音をきく」ように「線をきき」、その「きく」が交差する新しい感覚のあり方を軸に、演奏および描画行為の解体と再構築を試みている。(ささきしおり)

演奏された/描かれた結果物は、一見すると、それこそアンフォルメル美術のようでもあり、その上演、即ち描画過程は、ポロックや篠原有司男などのアクションペインティングの文脈を想起する。しかしここで重要なのは、これがあくまでも「演奏行為」としてなされているという点であり、つまり描画された結果物は、演奏行為の結果なのである。その結果物はもちろん、美術作品としても鑑賞し得るが、そのとき我々は、そこで行われたはずの演奏行為、即ち「音響」を想起する。「音楽をイメージした美術」は様々に描かれてきたが、「描く行為そのものが音楽」であろうとする美術のあり方は、これまでにはない体験を提案している。

2018年にはアジア音楽祭台湾大会におけるACL青年作曲賞の日本代表に選出され招待作曲家として参加するなど、作曲家としてそのキャリアを開始したささきは、ドローイングサウンドパフォーマンスの実践をはじめたことにより画材研究の必要に迫られた。今年に入り、京都芸術大学通信制大学院にて青木芳昭に絵画技法材料学を師事、様々な画材について示唆を得たことで、その表現方法を確立した。

カンバスに代えて、スネアドラムやティンパニ、バスドラムなど太鼓の構造を利用することで、強い張力と豊かな響きを得られるが、それに耐える紙としてユポ紙を利用。そしてそのような設定に適した絵具としてグラフィットを用いている。この絵具は墨のメーカーとして日本を代表する存在である株式会社呉竹が開発したもので、本パフォーマンスのために開発されたものを含む様々な色のヴァリエーションの提供を受けている。

今回は通常のドローイングサウンドパフォーマンス(ささき)に加え、異物の存在(川島)を介入させることで、「コンセプチュアルウイルス」なるお題に込めているのだが、しかしそもそも、このパフォーマンスを通じて視覚情報が常に聴覚情報をまとう感覚、つまり恰も「視覚に聴覚が感染する」かのような感覚を得たなら、以後、絵画の「見方」も変わる(常にその描画過程に存在したであろう音響を想起してしまうようになる)かもしれない。

2) 川島素晴作曲《And then I knew 'twas Virus》(2021/世界初演)

演奏：川島素晴、ささきしおり

川島素晴は、1994年より作曲家として「演じる音楽」を提唱し、実践している。従来の作曲家が「音」の連節によりその関係を構築しようとしてきたのに対し、ここでは「演奏行為」の連節として音楽をとらえることで、これまでにない音楽体験を得ようとするものである。

武満徹の作品に、E. ディキンソンの詩を拝借した《And then I knew 'twas Wind》という題名の曲がある。日本語では「そして、それが風であることを知った」と呼ばれるものだが、私にはもともと、この題名にあやかった作品として、《And then I knew 'twas Toccata》、つまり「そして、それがトッカータであることを知った」という作品があった。1998年に作曲したそれは、打楽器奏者がヴィブラフォンで奏する定型リズムが、アシスタントによって次々に行われる介入により異化するという内容である。ほとんどトレモロのように聞こえる連打音が、実は複雑なリズムパターンになっているということが徐々に明らかになっていくということが、題名の「そして、それがトッカータであることを知った」という軌跡そのものとなっている。

東京シンフォニエッタの委嘱により昨年作曲した《And then I knew 'twas Toccata II》は、そのようなアイデアをヴィブラフォンと室内管弦楽の関係に置き換えたものであるが、今回は、1998年の打楽器とアシスタントによる作品のアイデアを踏襲しつつ、2020年の室内管弦楽作品で用いたリズムパターンを使用している。



4分音符に換算すると9拍分、48の打音からなるこのリズムパターンは、最初が16分音符の連打、最後が32分音符（つまり倍速）の連打となっており、最初と最後の間の複雑な変拍子を経て、連打が倍速になる一連の流れと見ることができる。全体としてはほとんどトレモロに聞こえるこの高速なパターンの中で、実はその都度倍に変化している過程が繰り返される様は、細胞分裂に準えることができる。つまり、生命のプログラム（DNAの転写と分裂）が繰り返されているようなものと見立てられる。

この上演を通じて、バスドラム奏者（川島）は一貫してこのリズムを演奏し続けようとするが、そこに様々な異物（ささき）が介入することで、そのリズムは変質していく。このリズムパターンを塩基配列の情報と見立てるなら、異物の介入は、さしずめ、その転写を阻害するウイルスと見立てることができるだろう。今回の作品の題名を《And then I knew 'twas Virus》、つまり「そして、それがウイルスであることを知った」としたのは、このような想定があるからである。

ささきしおりがバスドラムにユポ紙を貼ってドローイングサウンドパフォーマンスを実践していることを横目で見ている、この仕立てを拝借することで、バスドラムに様々なオブジェを貼り付けるなど、通常のバスドラムでは実践不可能なことを実現できると考えた。こちらはあくまでも通常の意味での「演奏」のみであるが、今回並べた二つの作品は、バスドラムを用いるソロのパフォーマンスに対して、「コンセプチュアルウイルス」というお題に基づき異物が介入するという外見上の共通点を持つ。しかしそれだけに、それぞれが全く異なるコンセプトによる音楽実践であることを浮き彫りにするであろう。

ウイルスに侵された以上、「マスク」は不可欠である。